

第1日 9月7日(土) 13:00~16:20

13:00~13:25 オリエンテーション・開講式

第1講 13:25~14:45

近・現代歌人たちの詠む 越中万葉のうた

久泉迪雄 (日本短歌協会副理事長
富山県歌人連盟名誉会長)



万葉集を時代を超えた文学として読みたい。万葉集は、確かに日本最古の歌集であるが、とりわけ越中万葉と称される作品群を読み味わうとき、そこに生き活きと蘇ってくるのは、上代の日本人の叙情叙景でありながら、それがそのまま、現代のふるさとの実景と抒情とに通底しているという実感である。すぐれた近・現代歌人の越中讃歌を読み味わいながら、それをふるさと富山の文芸探究の基点に位置づけたい。

第2講 15:00~16:20

かささぎの渡せる橋 —「歌仙・中納言家持」の誕生—

小川靖彦 (青山学院大学教授)



平安時代から中世に大伴家持は「歌仙」の一人に数えられた。紀貫之は家持歌に注目し、藤原公任は『三十人撰』に「家持中納言」を挙げた。藤原俊成や定家も多くの家持歌を秀歌とした。しかしその評価の仕方は、『百人一首』が家持真作でない「かささぎの渡せる橋に」の歌を代表作としたように、現代とは異なる。謀反の罪で除名された家持(後に復権)を“古代”の和歌の名手と仰ぎ、その表現に学んだ平安・中世の人々の和歌観に迫る。

第2日 9月8日(日) 9:30~16:20

第3講 9:30~10:50

家持の歌のかたち —越中時代へ、越中時代から—

鉄野昌弘 (東京大学教授)



大伴家持の秀歌とされる歌を見ると、『万葉集』の一般の歌と較べて、言葉の配置が特殊だと思われることが多い。むしろその特殊性が、その歌を我々に秀歌に見せていると言うべきかもしれない。家持は『万葉集』の編者と目され、『万葉集』の「歌のかたち」については、知り抜いていたはずである。その「かたち」を家持がどう組み替え、独自のものを作り出して行ったのかを、越中時代を中心に、時期を追って確かめてみたい。

第4講 11:05~12:25

吉野行幸の「儲作歌」を めぐって

神野志隆光 (明治大学特任教授)



『万葉集』巻十七以下の家持の歌日記のなかに、その時に備えてあらかじめ作るということを明示する歌が八例を数える。他に例のないものであり、歌日記の注目すべき特徴の一つである。そのなかの、吉野行幸の「儲作歌」には、人麻呂の吉野行幸歌とのつながりが認められる。それをどうとらえるか。予作歌の意味とともに、歌日記の本質にかかわるものとして考えたい。

12:25~13:25 昼食

第5講 13:25~14:45

表現された「歌の道」 —大伴旅人・坂上郎女と家持—

市瀬雅之 (梅花女子大学教授)



大伴旅人には、漢籍を意識した作歌が知られています。坂上郎女は、先人の歌をよく学び、歌を蒐集・整理していたといわれます。ふたりからの影響が家持歌に認められるので、「大伴家の歌の道」を考えてみたくなるのですが、話はそう単純にいかないのでしょうか。『万葉集』には、大伴家に関わる歌が偏向して収められているからです。今回は、『万葉集』が編まれていることを念頭に置きながら、表現された「歌の道」を考えます。

第6講 15:00~16:20

赤人・憶良と家持

高松寿夫 (早稲田大学教授)



山部赤人からも山上憶良からも、学ぶところがあった家持だが、彼にとって、この二人の歌人に対する感覚とでもいべきものは、大きく異なっていたことだろう。赤人と家持とは、面識はおろか、直接遇ったこともなかったかもしれない。一方、憶良は家持にとって、父の直接の部下でもあった人物であり、顔見知りの間柄だっただろう。そのような関わり方の違いは、家持の二人の歌人の受容になにか影響を与えているだろうか。

◆歴史館の最新情報、日々の出来事はこちら!

- ツイッター 家持くん @manreki いけぬし君 @ikenushi おおいらつめちゃん @oiratsume
万葉人・高岡市万葉歴史館館長 @akahitomusimaro
- 坂本信幸万葉日記 (館長ブログ) <http://www.manreki.com/kancho/>



家持くん